

## 西日本で最も勢力の強い武家の氏族

16世紀後半に至るまで、広島に拠点を置く毛利氏は、中国地方（広島、岡山、島根、鳥取、山口から成る）において最も強力な武家の氏族でした。毛利元就（1497～1571年）の下、一族は権力の頂点に達し、東は現在の岡山県境から西は福岡県に至る広い地域を支配していました。

しかしこの支配は長くは続きませんでした。元就の孫である輝元が1600年の関ヶ原の戦いで負け組である西軍についたことから、勝利を収めた徳川家康は、輝元を罰する意味で領土を四分の一に減封することにしました。広島から追い出された毛利氏は、1604年に山口県の日本海側にある萩に新しく城を築城しました。これが長州藩（萩藩ともいう）の始まりです。

## 長州藩と明治維新

毛利氏は、日本の藩主が領土の朝廷への引き渡しを強いられた1870年頃に至るまで長州藩を統括していましたが、封建制度は今日の中央集権型の都道府県制度に道を譲ることになります。明治時代（1868～1912年）の初期には、それまで武家だった士族は、地元民との絆を弱くするためと、反乱などの問題を起こさせないように、東京に居住させられました。ですが1880年代後半までには状況も十分に落ち着いてきたので、藩主の毛利元徳公爵は東京を離れ、山口に帰ることができました。元徳は従者の一人に、広く近代的な住居に適した場所を見つけるよう指示しました。従者が見つけた場所は、防府の平野を見下ろす多々良山のふもとにある土地でした。暖かい気候と瀬戸内海の素晴らしい眺めに恵まれ、近くには港もありました（1904年までは鉄道は通っていませんでした）。

1892年、元徳は建設にゴーサインを下し、一家は土地の買収と木材の備蓄を始めました。しかし建設そのものは、日清戦争（1894～1895）とその後の日露戦争（1904～1905）によって遅れました。1912年についに建設が始まると、邸宅は5年で完成しました。元徳公爵は1896年に亡くなったので、1916年に準備が整ったときには、元昭公爵（1865～1938年）が毛利家として最初にこの邸宅に住むことになりました。

